

アジア・太平洋研究センター主催講演会

日 時：2012 年 12 月 14 日（金）

場 所：名古屋キャンパス J 棟 1 階 特別合同研究室

テーマ：海を知れば聖人が分かる——近世東アジア使節往来とその詩作

報告者：廖 肇亨（台湾中央研究院教授，東京大学客員教授）



古来，中国は海洋と非常に密接な関係を結んできた。とりわけ明清以降，朝貢貿易体制が確立すると，東アジア各国との海洋貿易が盛んになり，文化的な交流も深まっていく。そしてこのことは，文学作品にも反映されていった。特に「海洋詩歌」と呼ぶべき作品群は，悠久の中国文学史においても異彩を放っており，十分注目に値する研究対象だと言える。

中国の海洋詩歌において，使節の詠んだ詩は大変重要な地位を占めている。『春秋左氏伝』以来，詩を詠む伝統は脈々と受け継がれ，後世の外交使節にとっても作詩は当然不可欠な行為であった。そして近世，東アジアの文化交流において，外交使節は国を繋ぐ重要な媒介の役目を担うようになる。その一例に，琉球冊封使たちがいた。大海の荒波を越えて異国に赴いた彼らは，危機に溢れた航海の様子や異国で見聞した事物を細々と書き留めていったのだが，これらの記述こそが，他の文献に見られない重要性を有するのである。

東アジア各国の外交往来において，漢詩は常に重要な地位に置かれていた。使節の詩歌とは，単に風土や人情を記録するだけではなかった。それは自己と他者に対する認識を，時に近世東アジア地域の秩序やその世界観を，あるいは新旧の価値概念の対立と融合の様相を，さらには商業活動や社会の実情をよく体現しているのである。

そうした使節による各種記述の中，明・清代の琉球冊封使が果たした意義は大き

い。陳侃（1489－1538）以降、郭汝霖（1510－1580）や蕭崇業（？－1585）に到るまで、明代の使節による描写は、文化的に特色溢れた論述を展開しており、伝統的な儒学・詩学の内容をより深化させ、ある種の革新をもたらした。海の儒学と呼ぶべき一連の論述は、明代の琉球冊封使によって多大な発展を遂げていく。

江西陽明学に属する儒者だった郭汝霖は、嘉靖年間に琉球冊封使として赴いたのだが、その時の航海の体験を「洋中折舵歌」に詠みあげている。海上は、郭汝霖にとって生き抜く知恵を試す、陽明学が説くところの「生死道場」となった。海上で船の舵が壊れる苦難に見舞われた一行は、ただ波風に従って進むほかなかった。苦難を乗り越え、辛くも九死に一生を得たという経験は、郭汝霖にとって、「聖人の道を理解し、自然と実践する（契入聖道）」という儒教の伝統的な思想を一層深めるための契機となったのだった。

また、万暦年間に琉球冊封使となった蕭崇業は、自著の『使琉球録』にて、海を眺めることは儒学の理解に繋がるという考えを示した。即ち、万物をその身に収める大海の特質に端を発して、「海を知ることとは聖人を知ることと繋がる」と主張したのである。これぞ、海の儒学の本質だと言える。何故なら、その語は孔子が桴に乗って海に出たという故事と呼応しており、また明代陽明学に於ける、生と死の問題を考察する思想を一層深化させたものだったのだから。

明代の冊封使は、種々の煩雑な儀式的の場に限り、日頃の举止進退も、他者に薫陶を与えるような「徳」を備えていなければならなかった。使節を務めた陳侃や蕭崇業、夏子陽は、琉球より献上された金銭を返却したとして、『使琉球録』に記録されている。その行いは彼らの高潔な精神を示すが、その実こうしたやり取りは、多分に演出的な性格を有していたのだった。

清代には、使節による記述に新たな展開が見られるようになる。それは、当時の学術風潮と一脈通じるものがあつた。例えば康熙年間の徐葆光『中山伝信録』を見れば、『使琉球録』とは性格が大きく異なり、現地の地理関連の記述に重点が置かれている。さらに、乾隆年間の周煌（？－1785）『琉球国志略』もこの流れに連なった著作である。これらの著作は、清代考証学の隆盛に影響を受けた可能性が極めて高い。

あるいは、乾隆・嘉慶年間の使節を取り巻く文学活動から、当時の詩学の高潮を読み取ることもできる。趙文楷（1761－1808）と李鼎元（1750－1805）は、嘉慶帝の勅諭を拝命して嘉慶五年に琉球冊封使として出発したが、出航に際して友人たちから実に二千首もの詩を寄せられたという。文人たちにとって、この派遣が如何に重要なイベントであつたか、当時の文学活動が如何に活発であつたかが分かるエピソードだろう。送られた詩の内容は多岐にわたり、航海の様子をはじめ、海賊を掃討するさま、異国で見聞する事物など、琉球使節ならではの記述で溢れている。そして、使節を務めた趙文楷の「渡海放歌行」と李鼎元の「後航海詩六首」は、中国の海洋詩学の進展

に貢献した作品と言える。二人は琉球より帰朝する途上、蔡牽（1761－1809）という海賊一味の襲撃に遭い、激しい戦闘を繰り広げた。後に李鼎元は『使琉球録』に記述を残したが、それは琉球冊封使による記述の中でも珍しい、戦争の記録である。また、異国たる琉球について、李鼎元は現地の様子をこと細かに観察していた。自然景観や動植物、風土や習慣、何であれ自ら進んで見聞せんとする姿からは、清代中期の知識人による世界観や価値観が読み取れる。さらに注目すべきことに、李鼎元は琉球に派遣されている間、琉球と日本の交流についても注意を払い、一定の警戒を怠らなかった。琉球で流通していた銅銭や宝刀、果ては宗教や信仰などの事物から、琉球側は明言を避けていても、日本との確かな繋がりを看破していたのである。清朝の冊封使たちにとって、琉球は日本を観察する重要な窓口であった。

このように、明清代の海洋詩歌の作品群と使節による記述は、近世東アジア世界の世界観や秩序の構造および変化をよく捉え、表している。そしてこうした記述が、多くの人々のイメージの拠り所となっていくとも言える。海洋詩学は東アジア漢字文化圏において、広く深い影響を持ち、非常に豊富な内容を提供する分野であり、それ故に今後一層の研究が望まれるのである。

（文責：廖 肇亨，蔡 毅）